

亥の刻の女

松下幹生

夜の闇裂く 稲妻を背に
人の行ききも 途絶えた橋の
たもとに一人 亥(い)の四つ刻の
常夜灯から 洩れる灯りが
降りだす雨を 仄かに照らす
傘も持たずに あなた待つ
あなたはきっと やって来るはず

柳の下で ずぶ濡れの身で
袖からしたる 滴を落とし
妖しげな眼を 辺りに配り
佇む女 待ち人は来ず
悔し涙で 袂(たもと)を噛んで
手拭い被り 佇んで
あなたが通る その刻を待つ

橋を渡りて 来る下駄の音
ほろ酔いかげん 鼻歌まじり
ふらつく足で やって来る男(やつ)
俄に女 目の前に出て
やっと会えたワ ウラメシヤ〜と
お前のせいで 身を陥(おと)し
一言告げる 恨みの言葉